

# 古代歌謡論



古橋信孝

# 古代歌謡論

古橋信孝

冬樹社

**著者略歴**

**古橋信孝**(ふるはし のぶよし)

1943年東京生まれ。東京大学大学院博士課程修了(国文学専攻)。

現在、電気通信大学助教授。

**古代歌謡論**

---

昭和57年1月20日 初版第1刷発行

定価 2800 円

著 者 古 橋 信 孝

発行者 高 橋 直 良

発行所 冬 樹 社

東京都千代田区神田神保町3-27-6

郵便番号101 振替 東京 8-7757

電話 東京264-0346(代表)

印 刷 稲葉印刷株式会社

製 本 三和製本

装 幀 高麗隆彦

---

©Nobuyoshi Furuhashi 1982 Printed in Japan

0095-10420-5190

古代歌謠論 目次

|           |   |
|-----------|---|
| 序 章 ..... | 7 |
|-----------|---|

|               |    |
|---------------|----|
| I 文学の母胎 ..... | 19 |
|---------------|----|

|                            |    |
|----------------------------|----|
| II 古代天皇制の構造——古代共同幻想論 ..... | 29 |
|----------------------------|----|

|                 |    |
|-----------------|----|
| 一 古代王権の構造 ..... | 32 |
|-----------------|----|

|              |    |
|--------------|----|
| 二 祓の儀礼 ..... | 39 |
|--------------|----|

|               |    |
|---------------|----|
| 三 王権の拡大 ..... | 50 |
|---------------|----|

|                       |    |
|-----------------------|----|
| 四 天皇権の確立——歴史の成立 ..... | 57 |
|-----------------------|----|

|               |    |
|---------------|----|
| III 神謡論 ..... | 87 |
|---------------|----|

|                      |    |
|----------------------|----|
| 一 神謡(1)——米ヌナガネ ..... | 89 |
|----------------------|----|

|                     |     |
|---------------------|-----|
| 二 神謡(2)——ニギグチ ..... | 101 |
|---------------------|-----|

|                    |     |
|--------------------|-----|
| 三 神謡(3)——短歌謡 ..... | 116 |
|--------------------|-----|

|                        |     |
|------------------------|-----|
| 四 神謡と神話——狩俣祖神ニーリ ..... | 137 |
|------------------------|-----|

|              |     |
|--------------|-----|
| 五 八千矛神の「神語」謡 | 168 |
|--------------|-----|

|         |     |
|---------|-----|
| IV 詩の発生 | 207 |
|---------|-----|

|           |     |
|-----------|-----|
| V 謡の構成と展開 | 231 |
|-----------|-----|

|           |     |
|-----------|-----|
| 一 謡の基本的構成 | 232 |
|-----------|-----|

|          |     |
|----------|-----|
| 二 謡の表現様式 | 239 |
|----------|-----|

|          |     |
|----------|-----|
| 三 謡の表現構造 | 252 |
|----------|-----|

|          |     |
|----------|-----|
| VI 初期万葉論 | 265 |
|----------|-----|

|         |     |
|---------|-----|
| 一 文字の位相 | 268 |
|---------|-----|

|         |     |
|---------|-----|
| 二 都市の成立 | 280 |
|---------|-----|

|           |     |
|-----------|-----|
| 三 都市と村落の間 | 296 |
|-----------|-----|

|           |     |
|-----------|-----|
| 四 短歌形式の成立 | 312 |
|-----------|-----|

|         |     |
|---------|-----|
| 五 初期万葉論 | 320 |
|---------|-----|

VII 柿本人麻呂論…………… 343

一 儀式詩——日並皇子挽歌…………… 346

- 1、死の謡 2、初期万葉の挽歌 3、誄詞 4、古詞章(神謡)と  
挽歌 5、挽歌の方法

二 短歌論…………… 390

- 1、反歌と短歌 2、羈旅歌 3、幻視

あとがき…………… 426

歌謡索引

# 古代歌謡論



## 序 章

いつたい古代文学とは何なのか。古代とは何なのか。

近代の、その物質的豊かさのもたらした明るさが未来を喪失することによって色褪せていくとき、古代ブームが訪れてくる。古代こそ精神的豊饒の時代であったというように。ところがこれは、中世が、古代と遠ざかる不安を逆に古代を依り所とし規範とする観念をもち、また近世が、さらにその規範を喪失することによって国学を持ったというように、「歴史」に繰り返しあらわれる観念の構造であるようにもみえる。

そしてわたしが古代から始めなければならないと思い出したのは、わたし自身がそういう歴史性のなかに存在することを示しているにすぎないのかもしれない。しかしわたしは古代の精神的豊饒を希求したわけではなかった。現代に生きる自分をどう客観視しうるか、また文学とはいったい何かの問題が始源から位置づけてくることによってみえてくるのではとかがえたからにほかならない。したがっていわば冷たく、「歴史」を凝視することが、わたしのモチーフであった。そのばあい文学であ

るのは、むろんわたしの固有性の領域にある。言語表現に拘りつづけていたという以外に理屈づかれはしない。それゆえわたしは「文学史」を追求することとなった。かくしてわたしの古代は始まる。

しかし現代における古代から書き起こしたのは、わたしのモチーフを語るためではない。その問題は各章を概説しつつ後述するとして、近現代における古代の位置を文学研究の問題として述べておきたかったからである。憧れの古代である。つまりこちら側を古代に投影してしまふ。思想・文学ならば古典主義とか保守主義、ナショナリズムとして、それでもよい。しかし文学研究となるといささか異なってくる。そのようなイデオロギーを排して、まずは古代・古代文学をこちらの思い込みを排してあるがままに把握しなければならぬ。古代・古代文学を古代に返し、そのうえでこちらとの距離を見定め、という古代文学との往還運動を常にしていかなければならぬ。その意味で古代文学研究のレベルはそれほど高いものにはみえない。たとえば、わたし自身大いに学び、現在の古代歌謡研究の水準を押し上げた頂点にいる土橋寛は、Ⅲの五でふれる八千矛神の「神語」の「そだたき たたきまながり」の「たたく」について、当時の用例をさまざまに調べ上げたうえで、「タタクを撫でる意に解すると、十分に撫でまわすことになり、これはどうも変態的である」として「撫でる意」を退ぞけて<sup>(1)</sup>いる。ひとつの解釈を否定する根拠が「変態的」ということなのである。これは八千矛神と沼河比売の閨房の行為をうたっているのだが、そこに「変態的」と持ち出すのはおかしくはないか。いったい「変態的」とは近代の概念ではないのか。たとえば中近世には男色が広く行なわれ、男の心中物まであるように、男女の恋とほとんど対等に扱われたりもしていたが、それは「変態」とはいわれなかった。「変態」とはおそらく近代が、国家という均質的な空間としてあらわれたとき、各生活共同体ごとにそれなりに個別的にあった倫理に代替して、人間というものが抽象的な存在として幻想される

ことになり、普遍的な人間の倫理が取り出され、その倫理によって、個別的なもの（性の問題は性固有のものである）も社会の一般的な場に持ち出されて非難されるとき概念である。つまり近代的な価値基準をもったことばである。したがってなんの実証もなく「変態的」と論者がみなすことで古代の解釈をするのは、近代に生きる自分を相対化していないことになる。これはごく些細なことかもしれない。こんなことだけ持ち出すのは、土橋の成し遂げてきた仕事の価値からは無視してもよいことであるともいえる。しかし土橋の達成以降にわたしはいる。それゆえ土橋を越える方法を提出するのが学者としての土橋に対して、後から土橋の仕事をふまえていくわれわれの礼儀でもあるのだ。したがって細部にまでわたって土橋の方法を検討しなければならないのである。

土橋の方法は、いまだで一般化しているが、古代歌謡を儀礼のなかに位置づけ、また民謡と同列に置いてみることで、具体的にうたが個体の創作であるという近代的な文学観を否定してみせたところに大きな価値があった。しかし土橋は、その業績の集大成である『古代歌謡全注釈』が、結局古代歌謡を一つ一つ物語歌謡か独立歌謡かに分類することが一つの目的であるかのようにあらわれてしまっているところに限界をみせている。それはやはり謡を儀礼のなかに実体化していることにおいて、一方で個体の営為としての文学という発想を保持しつづけているといえる。土橋は言語表現のレベルそのものとして論じることができなかったのである。

ここに近代の対象化、文学の相対化という問題があらわれてくる。古代文学研究の具体的作業としては、誰でも当時の言語の用例を調べ、作品の意味内容を古代の言語水準に置いて解することから始める。ところが、次に多くのばあい、考古学・歴史学・民俗学などを持ち出すことで古代性を付加しようとする。つまり近現代との距離を埋めるのが、歴史・民俗であるかのようにふまえられ、それ

さえふれておけば、論者の感性なり文学観なりは作品に向つて開示しうるといふように、現在の標準的古代文学研究のレベルはある。そこには古代文学にふれることでこちら側が相対化されるという過程がない。つまり作品からふたびこちら側に還つてくる過程がない。文学を個体の内面を表出するものとするイデオロギーが、強固に絶対的真実であるかのように無前提に古代文学に当て嵌められていく。こちらの文学が古代文学に克たれることはないのである。したがって問題は、古代とは何かを観念（幻想）の構造として明らかにすること、古代文学とは何かをその観念の構造に置きながら、言語表現独自の論理として明らかにすることではない。

本書は、「古代詩論の方法試論」と題して「文学史研究」一〇五号（昭47・7）昭52・12）に連載したものを基本として、大幅に訂正加筆したことによって成った。その間にわたし自身の方法に揺れもあり、その揺れが本書に不統一をもたらしているようにみえるかもしれない。そこで各章の概説をすることですこしでも隙間を埋めておきたい。

「Ⅰ 文学の母胎」は「古代詩論の方法試論（そのⅠ）」（以下（そのⅠ）、（そのⅡ）のように記す）に発表したもの原型とする。日常的な秩序とは別のものをもたらしたいという意味で、祭式が文学ばかりでなく、あらゆる幻想領域の母胎となったことを述べた。もちろんこれは仮説ではない。ほとんど実証は不可能だからだ。論理の道筋として、そう規定することから出発する。「稲ガ種アヨ」を補ったりして「（そのⅠ）」を改稿した。それは祭式を実態として捉えすぎているようにあったからである。祭式を成り立たせている観念そのものを問題にしたかった。<sup>(2)</sup>そしてまず日常言語とは異なった秩序の言語表現がその祭式の観念に支えられてあらわれたことを述べた。

「Ⅱ 古代天皇制の構造」もⅠにつづけて「(その1)」に発表したものを元としている。「(その1)」においては、村落の長が天皇に至りつくまでを村落の共同幻想に根をもちながら、村落の具体性、個別性を抽象化していく過程としておさえ、天皇制の確立が個体としての天皇を引き出してくることに  
なり、それゆえ『万葉集』の抒情歌の生まれ出る問題に繋ぐといくように論理立てをしていたが、それが個の確立という問題を文学の外側から論じているようになっていたため、補筆訂正した。  
それでもⅢ以下の言語表現の分析とは異質にみえるかもしれないが、わたしにとって、言語表現そのものにしか古代文学研究の独自性はないと思いつながら、言語表現だけを切り離して論じていくことの  
後めたさともいえるか、言語表現を成り立たせている観念(幻想)も合わせかんがえているわけで、  
その観念を集中的に取り出して論じることになった。それは共同幻想の問題で、いわゆる歴史や民俗  
に依りかからない古代を文学論として提出できればということでもある。そしてわたし自身このよう  
に共同幻想を追うことで、言語表現の質の相違を見極める方法をえている。村落共同体と国家共同体  
の差が謡と、たの質の差としてみえてくる。ところでこの村落共同体といういい方がきわめて曖昧だ  
と繰り返し批判される。実態としてどのようなものを指すかということである。しかしこの概念は祭  
式を始源に置いたのと同じレベルで、始源の共同体を意味しており、かならずしも実態を意味しない。  
人間の原質みたいなものである。幻想としての村落共同体は常に存在している。それを始源において  
みると、きわめてわかりやすく古代がある。わたしの方法が発生論といえるのも、そういうところにある。

「Ⅲ 神謡論」はⅡと対になっている。Ⅱが観念(幻想)の構造を天皇制に焦点を合わせること  
で論じたのに対し、本章では具体的な言語表現の始源的な姿を論じた。そのばあいオキナワの神謡が中

心になっているが、それはここ五年近くオキナワにふれることで、わたし自身の古代に対する見方がある意味で変更せざるをえなくなったところから書かれたからである。かつて藤井貞和に「古代詩論の方法試論」を段階論で、亡滅の視座がないというように批判されたが、オキナワにふれるなかで、村落というものにぶつかっていき、国家と村落の落差に目を向けなければならなくなった。わたしの方法は観念的に過ぎ、国家の側に焦点を合わせ過ぎていたのである。その意味で、本章は村落の側の神謡をまさに発生論として提出せざるをえなくなったわけである。一・二・四節でオキナワの神謡を扱ったのはそのような村落の神謡の始源論としてである。そしてそこに村落共同体の共同幻想の言語表現をまず一節で論じ、次に個体に共同幻想の言語表現が関わる問題をやはり始源から考察すべきものとして二節を書き、さらに神話、歴史と関わる問題として四節を立てた。三節は「神話と神謡―抒情歌の系譜―」として「解釈と鑑賞」(昭55・2)に発表したものに補筆しただけだが、これもオキナワの神謡からの視座による。五節も古代日本の叙事的な神謡として提出できる八千矛の「神謡」(オキナワ)によって獲得された方法で論じた。オキナワと古代大和の謡を同列に扱ったのは、古代を普遍的に捉えてみたからである。ましてや同じ日本語文化圏の古代なのである。地域差を超えて、古代の概念を立てなければ、いつまでたっても世界的な水準に古代文学研究はなっていない。

「IV 詩の発生」も「(その1)」に載せたものを原型とする。ただしほとんど改稿した。「古代詩論の方法試論」を書いている初期の時点では、文学は個幻想であるという発想が強かった。現在でもその考えに基本的に立っている。ただ古代とは個幻想と共同幻想が言語表現において未分化であるのかのようにあらわれている。しかしだからといって、かならずしも言語表現の価値として低いかどうかは別の問題としてある。個別の「心」を表出しているうたのほうが、共同体の神謡より価値が高いとは

一概にいいない。したがって文学の価値は言語表現そのものに求めなければならない。神謡が多くあればあい言語表現としての価値が高くないのは、共同幻想に支えられてあり、言語表現独自の普遍性をもっていないからである。その意味で、言語表現が言語独自の動き<sup>はたら</sup>をもつのは、個幻想が言語表現として表出されるようになることと一致するということもできる。なぜなら個幻想の言語表現が普遍化するためには、言語表現が自立しなければならぬからである。その意味での文学（詩）の発生の問題を、本章では論じた。

「Ⅴ 謡の構成と展開」は「（その2）」の「文学の成立」を解体吸収して「Ⅱ 謡の表現様式」としたが、基本的に文学言語を支える神謡の構造から、祭式、幻想のうちにある神謡が祭式を離れても、尚かつ日常言語とは異質な謡でありうる根拠を、様式構造として論じた。

「Ⅵ 初期万葉論」は「（その3）」を訂正補筆した。前稿が文学論としては脆弱になっていたため、各節ごとに具体的に作品をあげて論じることによって補強した。ただし「Ⅲ 都市と村落の間」は「（その4）」に発表したものを改稿した。前稿では「古代社会の変質」として論じたが、ワザウタに焦点をあてて、謡の問題として書き直した。本章の眼目は謡からうた（長歌・短歌）へにある。その問題をさまざまなレベルで検討してみた。基本的に共同幻想と個幻想の関わりの変質と、謡と長短歌の言語表現の質の相違を対応させてみた。しかし「古代詩論の方法試論」を元にした各節の前半と補筆した後半に隙間がみえるとしたら、そのズレが現在のわたしの揺れを象徴している。

「Ⅶ 柿本人麻呂論」も、「Ⅰ 儀式詩」は「（その4）」「（その5）」を元にしてある。一節は主に儀式詩が神謡に支えられ、神謡の様式を方法化することによって成っていることを論じた。そして神謡を共同幻想の表現として儀式詩に方法化したとき、そこから逆に分化されあらわれ出てしまう（心）の

表出も論じた。「二 短歌論」は新たに書き下した。ここでも基本的に謡と短歌の質の差が問題になっているが、短歌の表現が何によって支えられているかを短歌の表現を明らかにする方向で論じた。そのばあい柿本人麻呂という個体の資質の問題にもふれてみた。しかしもちろん作家論を目指すものではない。人麻呂のうたに特徴的にあらわれている幻視を取り上げたが、それは語部的な問題としてある。つまり個体に収斂していくかどうか不明である。

本書は、以上のように始源を設定し、そこからの距離を量るという方法をとっている。その意味で、わたしの方法は発生論といいうる。発生論といったばあい、歴史も観念（幻想）の質として内在的に把握しうることになる。村落共同体との距離である。先に述べたように、村落共同体とはかならずしも実態を意味しない。古代の原型とでもいったような概念である。つまり村落が起ることから歴史が始まった。村落は、ある村落からある集団が分離して別の土地に移動し、村立てすることに始まった。それ以前をかんがえることはそれほど意味あるとは思えない。それを始まりと規定する。それは村むらがそういう村立ての神話をもっているからだ。つまり観念（幻想）としての始まりである。その意味で村落共同体から国家共同体への歴史は、古代国家における村落と国家の落差に構造的に対応する。歴史は時間概念であると同時に、空間を時間軸に置換したものとしてあらわれうる。そうはいっても、もちろん歴史の始まりとしての村落と国家の底辺の村落にズレはある。しかし原型としての史的村落はやはり古代国家における村落に残存している。実態としてというより、幻想（観念）として、その共同の幻想が村立て神話を生むことになる。したがって文学論としての共同体論は、そのような観念（幻想）の構造ということになるのである。